



Title	スウェーデン語のNiについて : スウェーデンとデンマークの違い
Author(s)	福井, 信子
Citation	IDUN. 2001, 14, p. 105-122
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95686
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

スウェーデン語の Ni について

— スウェーデンとデンマークの違い —

福井 信子

1. はじめに

私はデンマークを専門にしているので、言語について見たり考えたりするときもデンマーク語が中心になってしまう。デンマーク語には2人称単数の代名詞として De と du の2つの形があるが、最近この De と du について、1970年代以降の状況をデンマーク人はどう見てきたのか私なりに考えてみたことがある。¹⁾ おおざっぱにまとめるならば、この De と du の使い分けがはっきりしていた時代があり、その後 du が急速に広まり De がほとんど消滅しかけた時期があり、そしてまた De の勢力がほんの少し盛り返し現在にいたっているというのが、変遷の概略だといえる。デンマーク人自身がその移り変わりをどうとらえているのか、デンマーク人のいろいろな記述を読んでいると、スウェーデン語における状況について言及されることがあり、それが大変興味深く思われた。

たとえば、De が再び使われるようになったという脈絡で、スウェーデン語でも同じ現象が先行して起きているが、言語面だけではなく社会のほとんどの現象についてもスウェーデンは先行するのが常だという簡単なコメントがあった。²⁾ また、呼びかけの一つとして代名詞だけではなく肩書きも使用されたという脈絡で、スウェーデン語における肩書き使用が、非常に硬直した感じを与え、それがデンマーク人が抱くスウェーデン人のイメージにもつながっているというコメントもあった (Kisbye 1985: 29)。

スウェーデン語にも ni と du という2つの2人称単数代名詞がある。だがデンマーク語と大きく異なる点があり、スウェーデン語においては呼びかけるときに、2人称代名詞だけではなく肩書きの使用も大きな役割をはたしてきた。そのため、デンマーク語とスウェーデン語では呼びかけの代名詞に関して、その問題のありかは異なっていた。デンマーク語では親称と敬称の、ともかく代名詞の使い方についての問題であったのに対し、スウェーデン語では、肩書きの使用に対する代名詞の使用、という立場での問題であり、また後には du 対 ni という2つの代名詞の問題という形も出現してくる。

スウェーデン語では呼びかけの2人称単数代名詞や肩書きの使い方が非常に複雑だったため、それが問題とされることもデンマーク語より早かった。すでに19世紀から改革を主張する声があがり、「ni 改革」と呼ばれる運動が展開され始

めた．このような経緯もあり，呼びかけの問題はスウェーデン人自身によって非常に意識され，また注目されてきた．デンマーク語とは比べものにならないほど複雑な歴史を経てきていると言える．

この問題について，また変遷の歴史についてスウェーデン人自身が書いたものを読んでいると，稀にはあるがデンマーク語についての言及に出会うこともある．

研究という分野では，Eva Mårtensson が 1980 年代に “Det nya niandet” (1986) と “När myndigheterna blev du med oss – Om informaliseringen av det offentliga språket” (1987) という 2 つの論文を発表している．前者はそれまでの歴史も含め，1980 年代に出現したいわゆる「ni の新しい用法」を取り上げている．後者は官公庁のパンフレットなどを手がかりに呼びかけの形の変遷を扱っており，スウェーデンでは 1980 年代にすでにこのような意識で研究調査が行われていることを知ると，社会でのいろいろな現象に関しスウェーデンが他国よりも先に進んでいるということを実感させられる．

その Mårtensson の時代からさらに 10 年以上の年月がたっている．現代の状況を知るには，Catrin Norrby の “Kandidat Svensson, du eller ni – om utvecklingen av tilltalsskicket i svenskan” (1997) が Mårtensson にも言及しており，適切である．また最近出版された大部の文法書 Teleman *et al.* (1999) の *Svenska Akademiens grammatik* では，こうした 2 人称代名詞の用法についてどう記述されているのかも興味深い．また過去の記述としては，Wessén³⁾ (1970)，Wellander⁴⁾ (1973) のものなどがある．

この小論では，スウェーデン人がスウェーデン語における呼びかけの 2 人称代名詞の使い方の移り変わりをどう見てきたかをまとめながら，デンマークとは違った複雑な状況を考察する．

2. 人称代名詞における親称と敬称

ヨーロッパではほとんどの言語が，呼びかけの代名詞として 2 つの可能性を持っている．つまり 2 人称代名詞に親称と敬称の使い分けがある．たとえば仏語の *tu* と *vous*，独語の *du* と *Sie*，そして北欧語でもデンマーク語には *du* と *De*，ノルウェー語にも *du* と *De*，スウェーデン語には *du* と *ni* の区別がある．しかし周知のごとく英語は *you* の 1 つだけ，また北欧語のなかでもアイスランド語は *pú* だけを使用している．

ひとりの人間に対し呼びかけるとき，丁寧で形式的な代名詞として，2 人称複数形の代名詞が使われることもあれば，3 人称の代名詞が使われることもある．現在のデンマーク語では *du* と *De* であり，敬称として 3 人称代名詞が使われてい

る。ドイツ語もそうである。一方スウェーデン語では *du* と *ni* であり、この *ni* は 2 人称複数形の代名詞に由来するものである。フランス語もこちらに属する。英語の場合は *du* に相当する *thou* と 2 人称複数形の *ye* の 2 つを使っていた時代もあるが、1600 年頃より *thou* も *ye* も姿を消し、本来 *ye* の与格・対格の形である *you* に一本化されて現在にいたっている。

2.1. デンマーク語における敬称

デンマーク語での歴史をたどると、もともとは *du* だけであったのが、丁寧な呼びかけとして結局 3 つの可能性が生まれた。2 人称複数代名詞の *I*、3 人称単数代名詞の *han/hun*、3 人称複数代名詞が大文字で書かれた *De* の 3 種類である。デンマークの場合は常にドイツ語を手本として、ドイツ語を経由して入ってくるのであるが、これらはそれぞれドイツ語の *Ihr*, *er/sie*, *Sie* を範としたものである。ドイツ語の *Ihr* は中世初期に丁寧な呼びかけとして使われるようになり、それからデンマーク語へ広まりデンマーク語で一般的になったのは中世の終わり頃である。まず都市の上層の人たちの間で使われ、それがだんだん下へ広がっていき、見知らぬ人に対する丁寧な形として、さらには家庭で夫婦の間でまた子どもから大人への呼びかけとして使われるようになっていった。次にドイツ語では 17 世紀の初めに 3 人称単数代名詞 *er/sie* が丁寧な形として使われるようになり、デンマーク語では百年ほど遅れて 17 世紀末になってから、*han/hun* という 3 人称単数代名詞の呼びかけが使われるようになる。

さらにその後、ドイツ語では *Sie* を使うようになる。これは 17 世紀の終わりに出現し、18 世紀の間に社会の教養ある層の人たちすべてに広まり、現在にいたっている。由来としては *Eure Gnaden* のように「お慈悲」など普通名詞の複数形を含む表現を、代名詞に置き換えたものであり、後にそれが呼びかけだということをはっきり示すために大文字で書かれるようになった。だいたいデンマークではドイツから百年くらい遅れて広まると言ってもいいのだが、この *Sie* にならってデンマーク語でも *De* が使われるようになる。デンマーク社会の上層にはドイツ語を話す人が多かったため、この *De* は急速に広まっていった。1800 年頃には *De* が圧倒的に優勢となり、19 世紀の間に絶対的な地位を獲得する。先の 2 種類の言い方のうち *I* は方言に追い払われ、*han/hun* は社会の下層で一時期生き延びた後、消えていく (Kisbye 1985: 26)。

2.2. スウェーデン語における敬称

スウェーデン語ではひとりの人間に対する呼びかけは本来 *du* であり、複数の人間に対しては *I* が用いられていた。

この複数形 I がひとりの人間に対する丁寧な呼びかけとして使われるようになっていった。それは 14 世紀あるいはそれ以前にもさかのぼるという。「中世の時代に外国からの影響で、崇めようとする人に対して複数形 I で話しかけるという習慣が生じた。」(Wessén 1970: 56)。次第に、年上の人、立場が上の人に対してこの丁寧な呼びかけ方が広まっていった。妻が夫に、子どもが親に、召使いが主人に対して、そのほかに知らない人に対しても使われるようになった。スウェーデン語の I が、このようにひとりの人間に対して使われたとき、確かに礼儀正しいものであった。

だがその一方で、ni という別形が生じてくる。複数形は方言によって様々な形が生まれたが、なかでも ni は、ほとんどの方言に見られた形だという。Wessén によれば「ni という形は少なくとも 17 世紀の初め以来、中部スウェーデンの話言葉に存在している。これは、先行する動詞の末尾の -n と融合することにより、複数形の I から生じた。vissten-I が visste-ni となったように。」(Wessén 1970: 56-57)。

この ni がひとりの人間に対して使われた場合、一般民衆の間では I がそもそも使われ始めたときと同じように礼儀正しいと受け取られていたが、書物に親しみ教養ある人々の間では、ni はまず第一に間違った言い方と見なされていたという。そして 17 世紀の終わりには既に ni での呼びかけが「粗野だ (grovt)」, つまりあまり丁寧とは言えないと見なされ始めていた (Wessén 1970: 57)。肩書きの使用がすでに始まっており、肩書きを持った者と持たない者が接したときに、ni の一方的な使用が人々に意識されるようになった。肩書きを持った者、つまり立場が上の者は下の者に対して ni を使うが、下の者は上の者に対して肩書きを使うという事態である。それによって ni には横柄な感じ、不快な感じが伴うようになり、ni の価値はどんどん低められていった。

スウェーデン語では丁寧な呼びかけとして、後に ni となっていく 2 人称複数代名詞 I だけではなく、3 人称単数代名詞 han/hon も使われるようになったが、デンマーク語で最後に定着した De に相当する 3 人称複数代名詞は入ってこなかった。3 人称単数代名詞 han/hon を使った呼びかけは、ni よりも親切的な感じであり苛立ちも少ないと多くの人が理解していた、と Wessén (1970: 57) は述べており、それは今でもそう理解されていると 1970 年の本で書き添えている。Mårtensson にはまた次のような記述もある。「いくつかの方言、たとえばスコーネ方言では、ni は年長の家族や親戚に対する礼儀正しい呼びかけであった。だが大多数の方言、とくにスウェーデン北部では ni の使用が定着することはなかった。一般的にスウェーデン人は 3 人称の代名詞 han/honの方が ni よりも礼儀正しい呼びかけだと理解した。上層の階級では 18 世紀の後半にフランス語の vous に直接

対応するものとして ni が受け入れられた。」(Mårtensson 1986: 40). han/hon の方が ni よりも好感をもって受け入れられたのは、社会的立場や年齢が上の者から下の者へ、またその逆に下の者から上の者へと、どちらの方向にでも使われたからだと考えられる。

2.3. スウェーデン語での肩書き使用

16 世紀になると、スウェーデンでは高い身分の人に対して直接話しかけることを避けるようになる。貴族や大司教に対しては、Eders という所有代名詞に nåd <慈悲>, högvördighet <尊厳> などの普通名詞をつけた儀礼的な言い方が用いられるようになり、また (herr) greven <伯爵>, (herr) majoren <大佐>, (herr) borgmästaren <市長> など相手の肩書きが使用されるようになった (Wessén 1970: 57). 直接的な言い方を避けるという心理は、多くの言語で見られるものである。Eders nåd などの言い方が代名詞化されたのがドイツ語の Sie, さらにデンマーク語の De の由来であるが、スウェーデン語はその段階に進まなかった。

デンマーク語では De が使われ始めたのは 1700 年頃、確立されるのは 1800 年頃と比較的遅かった。そのためにまったく新しい形として受け取られ、かつての I に引きずられることなく、丁寧な呼びかけ語として社会のどんな場面でも機能するようになった。スウェーデン語の場合、I の後継である ni が早くから否定的な響きを持つようになったこと、社会のどんな場面でも使える丁寧な呼びかけ語が確立しなかったこと、そのような適当な語が見つからないまま肩書きの使用が始まったこと、それらがいまって、人々の付き合いのなかで結局肩書きの使用はどんどん広まっていった。まさにこの肩書きが社会のどんな場面でも丁寧な呼びかけとして使われるようになったのである。Kisbye (1985: 29) はユーモラスな例として、旅行中のスウェーデン人の話を紹介している。列車に乗り合わせた二人は herr tågpassageraren <列車乗客殿> と互いに呼びかけ合い、次に蒸気船に乗り換えたとたん、herr ångbåtspassageraren <蒸気船乗客殿> と言い換えるという話である。

肩書きを持っている人に対し、その肩書きを使わないで ni で話しかけることは失礼なこととされ、また肩書きを間違えることも無礼であった。肩書きを持たない者に対しては苗字に herr, fru, fröken をつけて herr Andersson, fru Petersson のように呼ぶか、あるいはただ苗字だけで Andersson, ファーストネームだけで Lars, Stina のように呼ぶのが普通となった (Wessén 1970: 57). いずれにせよ ni で話しかけることは状況が許さなくなり、うっかり ni を使おうものなら大きな反感を呼び、過敏な返答さえ引き起こしかねなかった。

厄介なことに肩書きは絶えず繰り返さなくてはならず、代名詞で置き換えられ

なかった。*Svenska Akademiens grammatik* によれば、肩書きで呼びかけるとき、再帰代名詞は sig が用いられ、Nu måste direktören skynda sig. <社長はお急ぎにならなくてはなりません.> のように言う。それに対し、前方照応の3人称代名詞が使用されるのは明らかに大衆的な響きがともなったときだけであり、標準言語としては肩書き表現が繰り返され、Nu måste direktören skynda sig om direktören vill komma i tid. <もし時間までに行かれるのであれば、社長はお急ぎにならなくてはなりません.> のように言った (Teleman *et al.* 1999: II 268)。

長い肩書きを繰り返すというのは非常に効率が悪く不便である。また初対面の相手の肩書きを知るのは難しいうえに、人の肩書きは変わることも多い。

デンマーク語にも肩書きの使用がなかったわけではないが、立場が上の人、特に高い地位の人に対して使うと考えられていた。Kisbye (1988) は次のような例を挙げている。Har direktøren tid et øjeblik? <社長さんは少しお時間がありますか.>。Jeg skulle bede kontorchefen kigge på sagen! <ぜひこの問題を見てくださるよう局長にお願いいたします.>。Hvad mener overlægen? <お医者さんはどう思われますか.>。高い地位の男性と結婚している女性についても pastorinden <牧師夫人>、godsejerinden <地主夫人>、professorinden <教授夫人> のように使われた。単純な役職名を呼びかけに使い、たとえば Må jeg ulejlige fuldmægtigen et øjeblik? <少しの間ご迷惑をおかけしてもかまいませんか.> と fuldmægtigen <主任事務官> に対して話すこともあった。特に高い地位の人でなくとも、社会での互いの役割を肩書きのようにして呼びかけに使うこと、これがスウェーデン語で社会全体に広まったやり方であり、一方デンマーク語では散発的に見られるだけにとどまり、そのような事態にはいたらなかった。デンマーク語には十分に敬意を示せる簡便な De が存在したからである。

子どもが親に対して far <父親>、mor <母親> という語を直接用いて、Vil far ikke ...? <お父さんは…したくありませんか.>、Synes mor ikke ...? <お母さんは…と思いませんか.> という言い方が、デンマークの一般市民のある範囲では戦後まで使われていたという。今ではデンマーク人にとってまったく奇異に感じられる表現であるが、この用法はスウェーデン語から入ってきた、と Kisbye (1988) は推測している。

3. スウェーデン語における「ni 改革」

スウェーデン語の歴史で「ni 改革」と呼ばれるものがあつた。19世紀半ばに起こり、1930年代まで活発に展開された運動である。スウェーデン語は、確かに親称の du ともう一つ ni という2人称代名詞をもっている。親称の du はデンマーク語等と同じように機能していたが、敬称の ni の価値が大きく下がってしまったた

め、19世紀の前半には、スウェーデン人自身が、スウェーデン語にはどんな場面でも丁寧な呼びかけとして使え、ある程度の距離をおいて話すときに便利な2人称代名詞、つまりデンマーク語の *De*、ドイツ語の *Sie* に相当するようなものがないと感じていた。*ni* は「客から店員に、肩書きを持った人から持たない人に、上司から部下に使われると、しばしば失礼で不親切だと理解された。呼びかけられた者が自分を社会的に弱い側だと受け入れなかったときには、また呼びかけられた者がこの表現によって社会的地位の違いを感じさせられたくなかったときには。」(Teleman *et al.* 1999: 267)。「*ni* 改革」とはこの *ni* の不快な響きを取り除き、中立的な丁寧な呼びかけの代名詞、フォーマルで礼儀正しい呼びかけの代名詞として確立させようとした運動のことである。

19世紀の半ばから新聞では *ni* 改革のキャンペーンが繰り返し行われるようになった。どのような宣伝が行われたかという、たとえば、何何という協会は会員相互のあいだで *ni* を使うことを決定した、あるいは著名なこういう人が *ni* の使用に賛同した、誰それは *ni* 改革を支持しているというような記事を定期的に掲載することであった。1865年の *Dagens Nyheter*⁵⁾ にすでにこのような記事が見られるという (Mårtensson 1986: 41)。

1920年代、30年代にこの *ni* 改革は再び燃え上がる。唱道者の一人である国語学者 Erik Wellander が、1935年に *ni* の使用を推進する小冊子を刊行した。*ni* の支持者たちは *ni* の導入を政府に働きかけたり、学校でこそまずこの改革を行うべきだと主張したりした。Wellander の小冊子に対抗して、同じ国語学者の Lars Levander⁶⁾ が新聞に「スウェーデン国民は *ni* 改革を必要としない」と題された記事を発表するなど、活発な論争が展開された。Levander は、実際問題として丁寧な代名詞が必要とされているのは社会の限られた範囲だけだと言う。上流階級や知識階級、都会の人たちがそのような代名詞を必要としているだけで、普通の大多数のスウェーデン人は他国に例を見ないほど仲間意識を持った *du* を使用している。遠慮なく *du* を使い始める若い労働者と、*du* の儀式を済ませてからでなくてはと思う学生が出会ったときも、最初の一瞬こそ戸惑いがあれ、握手をしてお互いを見つめてすぐに *du* を交わすようになり、それですべて解決すると、Levander は主張した (Mårtensson 1986: 41-42)。

このように活発な議論が行われ、*ni* 改革推進者たちが *ni* 導入を強く迫ったにもかかわらず、改革は広く浸透することはなく結果として失敗に終わった。1944年の8月10日の *Dagens Nyheter* に、この年行われた呼びかけについての調査結果が伝えられている。それによると、回答者のうちの37%は見知らぬ人に対して *ni* と言うほうを好み、24%は *frun* /*fröken* /*herrn* に固執し、17%は *du* と言い、15%は *damen* /*min dam* /*min herre* を使うというものであった (Mårtensson 1987: 28)。

ところで Mårtensson (1986: 42) の紹介している見方であるが、19 世紀の段階で ni 改革が起こったときには、呼びかけとしての肩書き使用をやめたいという切実なものがあつた。しかし ni の悪いイメージを払拭することはできなかった。それに対し Wellander が主張を展開した 1935 年という時代は、第一次世界大戦が終わってから年月も経過し、もうすでに労働者の間では団結を示す du が広まっており、政党や様々な組織でも du の使用が始まった頃である。du の使用が広まり始めているこの時期に ni を推進しようという動きは、Levander が指摘したように、スウェーデン全国民にとって意味を持つものとはなりえなかった。その意味で Wellander の主張は 19 世紀に行われてこそ力を発揮したものであつた。

4. スウェーデン語における「du 改革」

スウェーデン語の歴史には「ni 改革」だけでなく「du 改革」という言葉も存在する。

スウェーデンでは第二次世界大戦後、特に若い人の間で du が広く使われるようになった。1960 年代になると du の使用が社会全体に爆発的に広まり、1970 年代の終わりには du がほとんど唯一の呼びかけの形になってしまう。これが一般に「du 改革」と呼ばれているものであるが、これを改革と呼ぶのは適切ではないという意見もある。Mårtensson は、この「du 改革」とはスウェーデン人なら誰でも知っている非常にスウェーデン的なものだとしたうえで、だがいったい誰が始めたものなのか、改革が功を奏したのかどうかなど、意見が分かれており、実は改革などというものはそもそも存在しなかったのではないかと、スウェーデン語もスウェーデン人も du 改革に関心を持ったことはないのではないかと述べている (Mårtensson 1987: 27-28)。

du の広まりは、一般の人々の間で自発的に起こった「下からの変化」であるという点でその後の研究者の見方も一致している。⁷⁾ 人々は互いに平等だという意識を強く持つようになり、気取らずに団結を示す du は民主的なものとして受け取られ使われるようになった。

du の急速な浸透ぶりは社会の状況が変わってきたからであろうと考えられている。まさにその時代の只中で Wessén は社会の変化と du の広まりについて次のように記している。

「人々は自然に仲間として付き合う形で出会うことが以前よりも多くなっている：仕事、勉強、兵役、娯楽の場で。さりげなく互いに du で呼びかけることはますます日常的になる、知り合ってから短い場合でも、まったく初対面であっても。du は若い年代で、また特定の社会グループで、強く浸透している。人々は古い時代の階級意識からはまったく自由になっており、自分がこのように偏見がないこ

とを言葉においても示したいと思っている。」(Wessén 1970: 59).

du が 1970 年代末に向かってこれほど急速に広まった理由として Norrby (1997: 322) は特に次の 2 つを挙げている。1 つは、あらゆる状況で使える du というのは、肩書きや「汚染された (infekterat)」ni に比べてはるかに利点が大きかったこと、もう 1 つは、多くの職場や公共機関がすぐに一般的な du の使用を導入したこと、この 2 点である。職場や公的な場で du が導入されたこと、これがいわゆる du 改革である。

1960 年代に爆発的な広まりを見せる前に、すでに労働者の間で、また政党や他の組織でも du が使われ始めていた。いわば du 改革の準備期であるが、1950 年代には銀行や郵便局、出版社など様々な職場で変化が起こりつつあったことが新聞記事から垣間見られる。「肩書きでの呼びかけをやめ、誰もが herr を使うようになった」とか、「同じ任務についている者は du で呼び合うが、仲間でも年上の者や上司には肩書きで呼ぶことが多い」、「女子事務員は du の方を好む、lilla fröken という呼び方から解放されたがっている」、「Ni は味気ない」など、職場でのいろいろな状況が伝えられている (Mårtensson 1987: 28-29)。

1960 年代に入ると、Mårtensson の言葉で言えば、du の使用が「制度化され始める (institutionaliseras)」。まず公的な部門において、すべての人が互いに du と言ってもよいということが決定される。新しく「医療委員会 (Medicinalstyrelsen)」の委員長となった Bror Rexed⁹⁾ は 1967 年 7 月に肩書きの廃止を実行した。1968 年にはテレビの政治討論会で、政治家同士が du を使って議論するという歴史的な事態も出現する。1969 年に Olof Palme⁹⁾ が首相になったとき、Jag säger du i största möjliga utsträckning. <私はできる限り広い範囲で du と言う。> と発言して新聞で話題になった。だがパルメ首相は du 改革を組織的に実行することに関心があるわけではないと言い、次のように語った。「du で話すことは、私の側から何の手段を講じなくても育ってきた。たとえば職場や学校を訪問したときに自然とそうなった。du で話すことは特に何の手段をとらなくても育ってくる自然なプロセスだと私は思う」。しかし、60 年代末のパルメ首相を待たずとも、過去にも du で話すことを許した大臣がいた。1938 年に Per Albin Hansson¹⁰⁾ 首相は、du で話しかけられることに異存はないと言明し、1940 年代には Wigforss¹¹⁾ 大蔵大臣が「すべての人が du と言うことが完全に広まるまでは、スウェーデン語に秩序は生まれない」と語った。1965 年には Tage Erlander¹²⁾ 首相について、首相は原則として党員と du で話すが、実際に du と言う勇気のある人は少ない、と新聞記事にある (Mårtensson 1987: 29)。

デンマークでは 1982 年に、当時首相に就任した保守党の Poul Schlüter¹³⁾ が、自分に対して du と言わない人に対して私は腹を立てると発言し、物議をかもし

たことがある。¹⁴⁾このような政治家の発言が決してデンマークのものだけではないこと、というより、スウェーデンの例にならったものであることが、このようなスウェーデンの事例を知るとよくわかる。

話すときにはこのように du が一般的になっていったが、広告や書面での使い方について見れば 1960 年代末にはまだ du は優勢というわけではなかった。Wessén (1970: 60-61) は 1969 年 7 月の状況を 3 つの例を挙げて示している。それは①建築関係の広告と、②社会保険事務所からのお知らせ、③大学からの入学資格者に対するパンフレットである。最初の広告では Ni が使われているが、これはひとりの人に話しかけているとも複数の人に向かって話しかけているとも、どちらにとってもかまわないし、だれの反発も引き起こさず、自然であり効果的だと Wessén は評価している。②のお知らせは、あらゆる世代を対象としたものであるが、人称代名詞は大文字で書かれた Du が使われている。その一方で受動態も頻繁に用いられている。スウェーデンでは、いろいろな記入用紙の説明や設問には受動態が使われているのが特徴的だという。Wessén は「硬直した (stel)」受動態と呼んでいる。③は大学入学資格者が対象で、若者を念頭に置いて作成されたパンフレットである。大学改革について若者の信頼と協力を得ようと努めた結果、du が使われている、と彼は考える。同じ大学関係の冊子でもその後まもなく出されたものでは、直接の語りかけを避けて、つまり ni も du も使わないで「人は (man)」という代名詞を使っている。

Wessén はこうしたことから、1969 年当時の状況を、du と ni の選択に悩み苦しんでおり、ぎこちなく不自然だと判断している。Wessén はどちらか 1 つの代名詞に統一されるのではなく、親しい仲間同士で使う du と、礼儀正しく丁寧な ni の 2 つの呼びかけ語が、はっきりと分けられて存在することが望ましい、と考えている。親しくない場合、双方が距離を置いて話そうとするときの丁寧な代名詞があったほうが、人間同士の交際は軽やかなものとなる、スウェーデン語の現在の状況はゆがんでおり、大半のヨーロッパの言語と同じように 2 つを操作する体系になるべきだ、というのが Wessén の一貫した主張である。隣国のデンマーク語の De と du の使い分けが彼の目には望ましいものと映っている (Wessén 1970: 61-62)。

Mårtensson (1987) の「役所が私たちと du で話すようになったとき — 公的な言語の略式化」という論文は、公的な文書類で呼びかけの代名詞がどのように変わってきているかを調べたものである。40 年代から 80 年代までのパンフレット類を全部で 113 種類¹⁵⁾ 取り上げており、内訳は 1940 年代 6 種類、50 年代 24 種類、60 年代 23 種類、70 年代 21 種類、80 年代 39 種類となっている。

Mårtensson はその一覧を最後に掲げているが、その際「税金と申告」関係のも

の(54種類)と、「社会保険」関係のもの(59種類)に分けている。MårtenssonはWessénが例として挙げた③のパンフレットについて言及している。Mårtenssonの資料ではduが最初に現われるのは1970年代のパンフレットであるが、1960年代にもWessénの挙げたもののようduの例は見られる。但しまだ一般的ではない。Mårtenssonは1960年代を呼びかけの代名詞について混乱していた時代ととらえ、使い方に自信がなくなった人たちはこの問題を避けていると考えている(Mårtensson 1987: 44)。

広告に現われる代名詞について調査研究した他の論文¹⁶⁾を参照し、Mårtensson(1987: 44)はそのなかから1950-1975年の雑誌広告におけるduとniの頻度をまとめた表を紹介している。それによると、duとniの頻度が逆転してduのほうが優勢になっていくのは1971年である。Wessén(1970: 61)もこの記述の時点で、子どもや若者を対象とするお知らせや商業広告では、duで呼びかけることに利点がある、と認めている。

Hagemann(1988)は、1940年生まれのHagemannが自身の体験から30年間にわたるデンマーク語のduとDeの用法の移り変わりを振り返ったものである。そのなかに、Hagemannが大学生であったときの挿話がある。「1960年代の半ば、大学に新任のスウェーデン人の先生が来た。彼女は最初の授業時間のはじめに、私たちはスウェーデンの大学と同じように、duで話すことを前提とする、とはっきり言った。私たち学生の何人かは少々強引だと感じた。なぜなら私たちは互いにduで話していたけれど、先生たちとはそうではなかったから。だが1969年に私が副専攻の勉強を始めたときには、状況は変わっていた。今度は若手の先生と学生の間ではdu+苗字が使われた。」(Hagemann 1988: 140)。

またスウェーデン企業内でのduの使用がドイツ国内で多少の違和感をもって受け入れられているという例もある。スウェーデンの家具メーカーIKEA¹⁷⁾は1974年からドイツ国内にも支社を持っているが、当初より会社の全員がトップから臨時雇いにいたるまでduを使って話している。企業内の文書、従業員宛ての手紙、掲示板、すべてにduが使われ、文書の最後にもファーストネームで署名する。Besch(1998:80-81)は「命令されたDu(ein verordnetes Du)」という見出しでこれを紹介している。ドイツではこのような慣習はありえないので、Beschはイケアに対して呼びかけについての質問を発するのだが、イケアの側からはこれが会社の伝統で、特に理由はないという程度の回答しか返ってこなかった。このやり方がドイツ人の目に進歩的と映ったことも事実であり、会社内での連帯感を強める働きをしていることもBeschは認めている。だがそのうえで彼は疑念をはさむ。1988年に「ドイツ・イケア」社長は、イケア独自の呼び方が権威にとって問題とはならないかという質問に対して、「まったくそれは問題となりません。

du と言った方が簡単です。権威は私たちの場合には呼び方ではなく、人格に根拠を持っています。」と答えたことがある。それを引用しながら、はたして du と言うことですべてが簡単になるだろうかと Besch は疑問を呈している。ドイツ国内ではやはりドイツの慣習に従うべきだと彼は考えるのである。

社内での du の使用を裁判に訴えた例が近年あった。ヴェストファーレン＝ライン州にスウェーデンの衣料品販売会社 Hennes & Mauritz¹⁸⁾ があり、そこの 45 歳の部長が社内での du の使用に承服しなかったのである。1998 年 7 月に州労働裁判所でもラインの労働裁判所でも敗訴した。Besch はまだ判決理由を入手していないが、外国の会社の経営哲学が呼びかけについての地元の慣習や個々人の権利よりも優先されたのだらうと推測し、不満に思っている。

Kisbye は、ドイツ語での呼びかけの慣習は、デンマーク語と比べると、いくらか重々しく荘重であり、ロシア語やフランス語に近いととらえている。「知らない者同士の間で自発的に du が現われることはない。かつて私たちがそうであったように、同僚や知人の間で du へのイニシアティブを取るのは、年上の者かまたは社会的地位が上の者とされている。ドイツの大学生は最近まで以前と同じように Sie で話していたが、今ではより気楽な du がたいていの場所にだんだんと入りこみつつある。1960 年代に、北欧の学生が自分たちがいつも使っている du を自動的にドイツの大学で使おうとすると、気まずい感じがすることがあった。」(Kisbye 1985: 27)。

5. スウェーデン語における ni の新しい用法

スウェーデンではこれは “det nya niandet” と呼ばれている。これは 1980 年代の半ばに注目されるようになった現象で、その推進者は若者である。1960 年代生まれの若者は生まれたときから、du の使用が盛んになる一方の社会で育ったため、ni という代名詞についての過去の歴史や、それがどれほど否定的な響きを持っていたかという背景については知らず、また ni の使用を避けるために肩書きが使われたという煩雑な経験も持っていない。そのため ni を単なる礼儀正しい呼びかけとしてとらえている。

年配の人たちは、せっかく du が確立されているのになぜまた事態を複雑にする ni を使い始めるのかと、若い人たちの使い方に苛立った。古い世代の人たちにとっては、du は民主的で人々の団結を示す代名詞であり、あえて ni を使うことは人々の対等な関係に水をさす態度と映ったのである。一方若い人たちにとっては、du で話すことがあまりに自然であったため、改まって話をするとき、特に礼儀正しくしたいと思うときなどに別の言い方をしたいと感じ、それで ni を使い始めた。その意味で新しい世代にとっては du とは親しさを表わす代名詞であっ

たのである。たとえば就職のための面接の場で、若い人たちは丁寧な態度、礼儀正しさを示そうとして *ni* を使おうとする。それに対し年配の人たちは、大方の人はもう社会で職に就いているわけだから実際にそのような場面は多くはないだろうけれど、面接で *ni* を使わなくてはならないような職場ではそもそも働きたいとは思わない。世代間にこれだけの違いがあると考えてよいであろう。ただその古い世代も、具体的に自分の息子や娘が社会にうまく適応していくことを望むであろうから、若い世代が *ni* を使い始めているなら、息子や娘自身も状況を微妙に判断して *ni* を使うことにまでは異論をはさまないであろう。

Mårtensson (1986) は、*ni* の新しい用法が生まれてきた背景には、*ni* につきまといっていたいろいろなニュアンスが変わってきたからだろうと考え、若い人たちの間で調査を行おうとした。かつて Åke Bjerstedt という研究者が、ルンド大学で心理学を学ぶ 50 人の学生（大半が 20 歳から 25 歳という若者で、男性と女性が半々）を対象に、*du* と *ni* についてそれぞれどんな連想をもつか調査を行っており、その結果が 1958 年の *Nysvenska studier* に発表されている（Bjerstedt の論文は筆者未見）。Mårtensson も 1985 年に同じようにルンドの心理学専攻の学生 50 人（但し男性 15 人、女性 35 人）を対象に同じ質問表で調査を行い、さらに 50 人の高校生に対してアンケート調査を行った。

連想テストでは 10 組の語のペアを挙げて、たとえば「温かい」と「冷たい」を両極端にして全体を 7 段階に分けると、*du* と *ni* はそれぞれどこの段階に連想されるかという平均値の位置づけを示した。10 組の語とは *när* <近い> と *fjärran* <遠い>、*varm* <温かい> と *kall* <冷たい>、*mjuk* <柔らかい> と *hård* <堅い>、*avslappen* <くつろいだ> と *spänd* <緊張した>、*ung* <若い> と *gammal* <年取った>、*närmande sig* <近寄る> と *avlägsnande sig* <遠ざかる>、*positiv* <肯定的> と *negativ* <否定的>、*avrundad* <丸みのある> と *kantig* <角ばった>、*vanlig* <普通の> と *ovanlig* <まれな>、*låg* <低い> と *hög* <高い> である。1958 年と 1985 年を比べると、「若い・年取った」「普通の・まれな」のペアを除くと、どれも *du* と *ni* の連想は互いに歩み寄っている。だが距離感や年齢に関してはどちらの調査でもはっきりと、「近い」、「近寄る」、「若い」は *du* で連想され、「遠い」、「遠ざかる」、「年取った」は *ni* で連想されている。1985 年の方では、*du* が誰に対しても使われるようになった結果、*du* についての「柔らかい」、「温かい」、「丸みのある」という連想が 1958 年よりも低くなっているという (Mårtensson 1986: 26-27)。

また高校生に対するアンケート調査には、18 の語を挙げ、*du* と *ni* のそれぞれで連想されるものに印をつけるというものや、状況を挙げてこのような場合に *ni* を使うと考えられるかを問うものなどが含まれていた。全体として Mårtensson は、

du の肯定的な意味合いが薄れてむしろ中立的と受け取られるようになり、一方 ni からは否定的な響きの多くが消えてしまっている、とまとめている(Mårtensson 1986:32)。

さらに 90 年代に入ってから、Norrby (1997) も同じ連想テストとアンケート調査を繰り返し、40 年の変遷をたどろうとした。Norrby は ni の一般的な連想として 1985 年と 1996 年のどちらでも「礼儀正しい」、「年取った」、「遠い」、「親切的な」を挙げている。連想の度合いがおおむね 1996 年では弱まっているなかで、「親切的な」だけは、もちろん du での連想が高いわけだが、ni で連想するという度合いも高まっていることは興味深いと Norrby は指摘している。Norrby によれば、du に対する連想は 1985 年よりも 1996 年の方で、「近い」、「温かい」、「近づく」、「肯定的」、「丸みのある」という面が強くうけとめられている。一方、ni はかつての否定的な連想は消え、1985 年よりもなおいっそう肯定的な価値を与えられている。1958 年の調査以来、ni は「遠い」という基準に関して一定の価値を持っている。これは距離を作り出すという機能が ni に求められていることの表われだろうと Norrby は述べている。

社会全般で du が使われていると見えるデンマーク語においても、若者の間に De を使い始める傾向が多少見られるという。二十代後半の若者が、自分では du と呼ばれるのが自然だと思っているのに、年上の大人に対して De と言うことがある。またコペンハーゲンに限ってだが、社会的に上層の家庭の若者は、年配の大人に対して De を使うことが一種社会的地位の印だと考えていることがうかがえる (Hansen 1998: 22)。だがデンマークでは、スウェーデンのように De の新しい用法として注目されるまでにはなっていない。

6. まとめ

北欧語では他のヨーロッパ言語に比べて親称形の使用範囲が広いと受け取られている。たとえば北欧からドイツの大学に勉強に行った者は、北欧の慣用を持ち込んで教師とも du で話すのを当然とってしまうが、ドイツではまだそのような状況ではない。またフランス人の男女がそれまでの vous から tu で話し始めたときには、非常に親密な雰囲気を感じられるが、デンマーク語の場合には du がそのような雰囲気を醸し出すことはない。

北欧としてまとめられると、女性の社会進出が盛んで男女平等の進んだ国、社会民主党政権のもとで社会福祉が進んだ国という北欧の一般的なイメージが優先してしまい、北欧内部の違いはあまり意識されない。スウェーデン語の du と Ni が、デンマーク語の du と De に完全に対応するわけではないことは、見てきたとおりである。

スウェーデン語の歴史でどうして *ni* がそれほど否定的なニュアンスを帯びるようになったのか、その否定的なニュアンスというものが、どの程度に慇懃無礼なのかあるいは粗野なのか、私にはまだ判断と理解できない。ここで私が考えるのは、*ni* が使われていたような状況をたとえばデンマーク人であっても同じように感じ、デンマーク人であっても同じように *ni* をどんどん否定的にとらえるようになったか、ということである。スウェーデンでは肩書きがある者に対しては肩書きが使われたため、*ni* は肩書きのない者に対して、つまり立場が上の者から下の者へと一方的に下向きに使用されるようになった。一方的に使われることを、いわば安定した状態とうけとめ反発を感じることなく淡々と使い続けるという行き方もあったはずである。だがスウェーデンではそうはならなかった。

ni と「呼びかけられた者が自分を社会的に弱い側だと受け入れなかったときには、また呼びかけられた者がこの表現によって社会的地位のちがいを感じさせられたくなかったときには」、失礼で不親切だと感じられた、という記述があったことは先にも述べた (Teleman *et al.* 1999: 267)。このような記述の背景として、スウェーデンの社会全体には、社会的な立場の違い、社会的地位の違いが人間同士の付き合いの中で必要以上に強調されることを好まない傾向があるのではないかと私は考える。スウェーデン人は立場や地位の違いを感じさせられるような状況に対し、どちらの立場の者も、地位のある者もない者も居心地の悪さを感じるからではないかと私は推測する。それは一種の平等意識、仲間意識と言えると思うが、それが他国たとえばデンマークよりも非常に強かったことが、呼びかけの 2 人称代名詞や肩書きの使用の複雑な状況につながったのではないかと。

スウェーデン人の場合、肩書きを互いに使っていたということは、社会的地位にこだわっていたからだという印象を与えるが、実は、立場や身分の違いがあることを感じさせる *ni* の居心地の悪さから逃れるためであり、平等に徹したかったからこそ肩書き使用が異常に広まってしまった。人間同士は対等であり、対等であるべきだという意識は社会全体に浸透しており、そのためちょっとした不平等にも敏感に反応しそれをなくそうとする。そのような態度が他国の目には、細かいことにこだわり融通がきかないと映ることがあるのかもしれない。これほど平等意識の高い国民であったから、1960 年代、1970 年代の *du* の広まりも「*du* 改革」と通称されるほど徹底していた。企業内で *du* を導入したときも、デンマークでは当初新聞等で冷ややかな反応が見られたのに対し、スウェーデンでは迷うことなく推し進められた。

注

- (1) 福井信子 (2000).
- (2) Aabo, Birgitte. 1988. "De i stedet for du". *Politiken Weekly*, 20.7.1988. この中に Dansk Sprognævn の Arne Hamburger のコメントが引用されている.
- (3) Elias Wessén (1889–1981) 言語学者. 1928–56 年ストックホルム大学ノルド語学教授.
- (4) Erik Wellander (1884–1977) 言語学者. 1931–51 年ストックホルム大学ドイツ語学教授.
- (5) スtockホルムで発行されている日刊紙. 創刊は 1864 年.
- (6) Lars Levander (1883–1950) 方言学者, 文化史研究家. 1920 年よりウップサーラの方言・民俗学研究所の学術研究員. ダーラナ地方の方言と民衆文化を特に専門とした.
- (7) Ahlgren, Perry. 1978. *Tilltalsordet ni* など. これは ni を歴史的に幅広く扱った重要な博士論文であり, Mårtensson もいろいろな箇所を引用している. 今回入手が脱稿直前だったため, 私自身はあまり参照できなかった.
- (8) Bror Rexed (1914 年生まれ) 医師. 1953–67 年ウップサーラ大学解剖学教授. 1967–68 年には Medicinalstyrelsen の, 1968–78 年には Socialstyrelsen のそれぞれ委員長を務めた.
- (9) Olof Palme (1927–1986) 社会民主党の政治家. 1969–76 年, および 1982 年から暗殺される 1986 年まで首相を務めた.
- (10) Per Albin Hansson (1885–1946) 社会民主党の政治家. 1932–46 年の 14 年間首相を務めた.
- (11) Ernst Wigforss (1881–1977) 社会民主党の政治家. 1925–26 年, および 1932–49 年の長期にわたって大蔵大臣を務めた. 方言学者でもあり, 1913–18 年にはルンド大学ノルド語学科助教授の経歴を持つ.
- (12) Tage Erlander (1901–85) 社会民主党の政治家. 1946–69 年首相.
- (13) Poul Schlüter (1929 年生まれ) デンマークの保守党の政治家. 1982–93 年首相.
- (14) Larsen, Helle Ravn. 1982. "Tænk før du/De taler og dømmer". *Berlingske Tidende*, 26.9.1982.
- (15) Mårtensson の本文では 112 となっているが, 最後に挙げられている一覧を見ると 60 年代のパンフレットが 22 ではなく 23 あり, 全部で 113 種類ということになる.
- (16) Mårtensson が引用しているのは, Nowak, K & G. Andrén. 1981. *Reklam och samhällsförändring. Variation och konstans i svenska populärannonser 1950–1975*. Lund.
- (17) IKEA は 1943 年に創立された世界有数の家具メーカー. IKEA とは Ingvar Kamprad, Elmtaryd, Agunnaryd の頭文字.
- (18) H&M と略される衣料品販売会社. 最初の店舗は 1917 年に開かれた.

Om det svenske tiltaleord *Ni* – Forskellen på forholdene i Sverige og Danmark –

Nobuko Fukui

Resumé

Som de fleste europæiske sprog har både svensk og dansk mulighed for at bruge to slags stedord som tiltale til en enkelt person. Dansk råder over *du* og *De*, der svarer til *du* og *Ni* i svensk. Men der er en stor forskel, når man ser på forholdene i de to sprog. Dansk *De*, som kom ind i sproget efter det tyske mønster i 1700-tallet, har holdt fast på sin neutrale værdi og er blevet ved at fungere som et høfligt tiltaleord. Svensk *Ni* var egentlig flertalstiltale og brugtes som den høflige tiltaleform over for en enkelt person. Men ordet fik efterhånden en så negativ klang, at det blev upassende at bruge *Ni* alene, når man ville vise sig høflig.

I stedet for *Ni* begyndte man at bruge titel som tiltale i næsten alle situationer i samfundet. Titelbrugen var dog belastende og upraktisk, dels fordi titlen måtte gentages gang på gang i samtalen, og dels fordi det ikke var nemt at kende den rette titel ved en person.

Allerede i 1800-tallet opstod der en såkaldt *ni*-reform i Sverige. Der var nemlig en bevægelse, der ønskede at afskaffe titelbrug og etablere *Ni* som en neutral høflig tiltaleform. Men stærkt negative associationer ved ordet forhindrede *Ni* i at blive brugt som almindelig tiltale. Senere i 1930'erne kom *Ni* på tale igen, men dengang var *du* allerede almindeligt i visse kredse, og man følte ikke mere behov for *Ni*'s etablering. Og så kom 1960'erne og 1970'erne, hvor *du* udbredte sig voldsomt og blev det enerådende tiltaleord.

I midten af 1980'erne opdagede sprogforskerne den nye brug af *Ni* blandt unge mennesker. De unge, der ikke kendte til den negative klang ved ordet *Ni*, opfattede det som en høflig og passende tiltaleform, når de følte at *du* lød lidt for intimt. En sådan ny brug af *Ni* eksisterer stadig, og man kan godt sige at brugen næsten er etableret. Den stærke udbredelse af *du* fandt også sted i Danmark i 1960'erne og 1970'erne. Men nu til dags mærker man at dansk *De* er ved at vende tilbage i sproget, nemlig blandt de unge, der vil markere sig som høflige.

参 考 文 献

- Besch, Werner. 1998. *Duzen, Siezen, Titulieren. Zur Anrede im Deutschen heute und gestern*. Göttingen: Vandenhoeck und Ruprecht.
- 福井信子. 2000. 「デンマーク語の De と du について — 1970 年代以降の状況をデンマーク人はどう見ているか — 」, 『汎バルト海・スカンジナビア国際学会誌』, 第 8・9 号, 59-82. 札幌: 汎バルト海・スカンジナビア国際学会.
- Hagemann, Henrik. 1988. “Hej, du dér – Brugen af DU og DE gennem 30 år i personlig belysning”, Hansen, Erik og Jørn Lund (ed.). *Sproget her og nu*, 136-145. Dansk Sprognævns Skrifter 14. København: Gyldendal.
- Hansen, Erik. 1998. “Skulle vi ikke være Des?”, Erik Hansen og Ole Togeby (red.). *Mål & Mæle*, 21. årg., nr.1, 19-22. København: G.E.C. Gad.
- Holmes, Philip & Ian Hinchliffe. 1994. *Swedish. A Comprehensive Grammar*. London and New York: Routledge.
- Kisbye, Torben. 1985. “DU og DE i nogle europæiske sprog – tiltaleformer i kulturhistorisk belysning”, Erik Hansen og Ole Togeby (red.). *Mål & Mæle*, 10. årg., nr. 3, 23-31. København: G.E.C. Gad.
- Kisbye, Torben. 1988. “Dutteri skaber ikke demokrati”. *Jyllands-Posten*, 22.7.1988.
- Mårtensson, Eva. 1986. “Det nya niandet”, *Nordlund*, 10, 35-79. Lund: Småskrifter från Institutionen för nordiska språk i Lund.
- Mårtensson, Eva. 1987. “När myndigheterna blev du med oss”, *Nordlund*, 13, 25-78. Lund: Småskrifter från Institutionen för nordiska språk i Lund.
- Norrby, Catrin. 1997. “Kandidat Svensson, du eller ni – om utvecklingen av tilltalsskicket svenskan”, Andersson, Anders-Börje, Ingegerd Enström, Roger Källström och Kerstin Naclér (ed.). *Svenska som andraspråk och andra språk*, 319-328. Festskrift till Gunnar Tingbjörn. Göteborg: Institutionen för svenska språket, Göteborgs universitet.
- Teleman, Ulf, Staffan Hellberg & Erik Andersson. 1999. *Svenska Akademiens grammatik*. II. Stockholm: Norstedts Ordbok.
- Wellander, Erik. 1973. *Riktig Svenska*. Stockholm: Esselte Studium AB.
- Wessén, Elias. 1970. *Vårt svenska språk*. Stockholm: Almqvist & Wiksell Förlag AB.